# 歌の力と歌の効能

藤島秀憲

・原発をかかる人らに任せてゐたのかしどろもどろの東電の会見
長谷川櫂『震災歌集』

・おどおどと首相出てきておどおどと何事かいひて画面より消ゆ

『震災歌集』は震災の日からの十二日間を短歌で記録した歌集。震災の夜から「荒々しいリズムで短歌が次々に沸きあがった」「私は俳人だが、なぜ俳句ではなく短歌だったのか、理由はまだよくわからない。」と長谷川は書いている。紀貫之の「仮名序」を引用しつつ歌の力を説いているのだが、言っていることは「歌の効能」に過ぎない。作者の慰めで終ってしまうのならば「歌の力」とは言えない。歌が読者の力になって初めて「歌の力」と呼ぶべきだと、わたしは思う。長谷川の歌が「歌の力」ではなく、「歌の効能」によって作られていることは歌集を読めばわかる。短歌の記録性を生かして表現の欲求を満たしたのだろう。

作家の小川洋子と神経生理学者・岡ノ谷一夫の対談集『言葉の誕生を科学する』（河出ブックス）を読んで言葉に関する様々なことを知った。言語の歌起源説、鳥と同じように求愛のために歌っていた人間が、異性にモテタイがために歌を高度化させて言葉になったという説。あるいは、言葉を持たない生き物には現在という時間しかなく、言葉があるから時間の感覚が生まれる。だから、言葉でしか時間は表現できない。なんでも表現できそうなパントマイムだが「きのう」「あした」などの時間表現は不可能で、その時だけは「きのう」と書かれたボードを見せるのだという。

・助動詞に溺れて過去を記したり過去形のない日本語の湖
本田一弘『眉月集』

・近代の分厚い舌に舐められて口語の歌がふるへてゐるよ

・声々と文字の間（あはひ）を歌ふなりゆらてゝくゆりてゝくゆらてゝくゆりてゝく

『眉月集』は第十六回寺山修司文学賞を受賞した歌集。美しい文語の中に口語や方言や怒りや悲しみやユーモアやエロスを挿入し、攪拌し、熟成させ、なおも日本語の美しさを保っている一冊である。時間や空間の幅が広く、拒絶と受容を繰り返した末に獲得した作風なのだろう。三首目の歌、短歌とは声と文字の間を歌うというのは、本田が目指すところだと思う。

本田は二〇〇〇年に出版した第一歌集『銀の鶴』の「あとがき」に「歌を作るということは、五句三十一音のなんとも不思議な器にことばを流しこんで、いわゆる『楽譜』を作っていくことなのだろう。その『楽譜』は、万葉以来いやそれ以前からさまざまな人々によって口遊まれてきたし、これからも口遊まれてゆくだろう。この先、一首でいいから一人でいいからだれかに口遊んでもらえるような歌を作りたい」と書いている。読者に届ける思いを持っている。口遊むためには文字だけでなく、声も必要だ。本田の願いは第二歌集によって実現された。たとえば十年後『震災歌集』が出たという事実は残るだろうが、口遊まれている歌があるかどうか。こんな時期だからこそ余計、真の力を持った歌を読者に届けるべきだと思う